

さようなら原発・核燃「3.11」弘前集会アピール

今年も、3月11日を迎えます。

7年前のあの凄まじい大津波と、その後起こった凄惨な原発事故を昨日のように思い出します。

原発事故としては世界最大の事故でした。本日お招きした吉澤さんのお話にもありましたように、福島にはまだ故郷に戻れない人が数多く存在し、その地域の復旧にはまだまだ気の遠くなるような年月を要します。

しかし、あれから日本政府は本当に「原子力」の恐ろしさを心に刻み、社会を変えようとしてきたでしょうか。再生可能エネルギーの進歩により、原子力発電の必要性などほとんどなくなっているにもかかわらず、再稼動に固執する政府には「核の機微技術保持」という考えがあらさまになってきました。すなわち、核軍備のために核の技術を捨てたくないのです。

人類の科学の歴史の中で、先の20世紀は様々な発展があった一方、「核兵器と原発」を生み出してしまいました。「核」は世界を破滅できる力を持つ兵器でありながら、我々は未だにそれを破棄できないでいます。これまで原子力発電は核の平和利用であり、核軍備とは違う、というのが為政者の建前でした。しかし、原子力発電および核燃料開発の必要性がなくなってゆく社会の流れの中で、原子力発電と核開発は表裏一体の技術として進みつつあります。現政権は科学技術予算を大幅に削減する一方、武器開発を含む軍事予算を増大させています。

福島原発事故とその後の対応により、科学に対する市民からの信頼が失われる結果となりました。しかし今一度、科学と「市民」の間に、「科学を理解し、科学を監視し、そして科学を批判する」そう言う関係を再構築しなければなりません。核や軍事技術の平和利用といった言葉に騙されることなく、私たちの子孫に平和で安全な世界を残さなければなりません。

本日、福島の吉澤さんをお迎えし、弘前の地で三度目の「3.11」脱原発・反核燃の集会を開きました。青森県は「原子力・核燃料」に関しては世界の中でも突出した地域です。東通原発に始まり、六ヶ所の核燃料サイクル施設、むつの中間貯蔵施設、そして大間に建設中のフルモックス原発といった、核開発の負の遺産がこの小さな県に集中しています。こうした施設を受け入れながら、とうとう青森県の経済は原子力マネーに頼らざるをえない状況に陥ってしまいました。

青森県が原子力マネーに頼らなくても良くなるような新たな地域の発展を、歴史の深い城下町である弘前から発信してゆくことは大きな意義のあることです。

本日ここに集まった一人一人の力は小さいけれど、それを集結して大きな力を作り出し、社会を、そして人類を救う力に育ててゆくことをこの場で再確認し、本集会の

アピールにします。

2018年3月3日 さようなら原発・核燃「3.11」弘前集会